

150th
AOMORI RINGO

150周年

青森りんご植栽

いま私たちが食べているりんご(西洋りんご)は明治時代の初頭に日本に入ってきました。江戸から明治に変わり、日本は国を豊かにしようと、外国から様々なものを取り入れ、その中にりんごをはじめとする果物の苗木もありました。

国から全国各地に配布されたりんごの苗木は、青森県にも明治8年(1875年)4月に3本届けられ、青森県庁構内に植えられました。これが青森りんごのはじまりであり、令和7年は青森りんご植栽150周年となります。

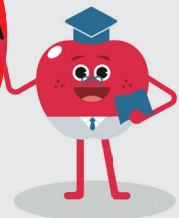
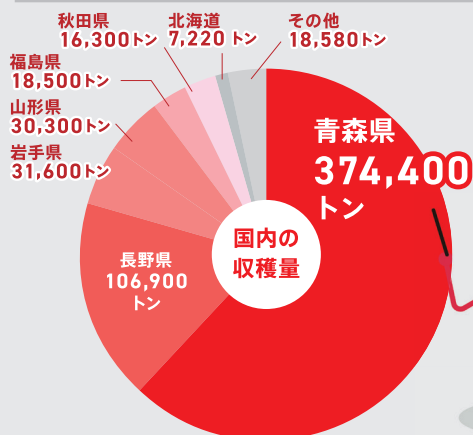


べにしほり
品種名 紅紋

青森県つがる市には明治11年に植栽されたりんご樹が今も健在で、秋には赤いりんごを実らせています。「日本一の古木りんご樹」として青森県の天然記念物にも指定されており、幹回りは3m以上もあります。

都道府県別りんごの収穫量 603,800トン

令和5年産



青森りんごは全国シェア約6割

青森りんごは、明治39年(1905年)には生産量全国第1位となり、その後は首位の座を守り続けていましたが、第二次世界大戦の影響により昭和20~21年(1945年~1946年)には首位の座を譲ります。しかし、戦争で荒廃したりんご園を復興すべく立ち上がった生産者や関係者の尽力により、昭和22年には生産量首位に返り咲きます。その後も台風などの自然災害や価格の暴落、病害虫との闘いなど幾多の試練を乗り越え、「日本一のりんご王国青森県」があります。

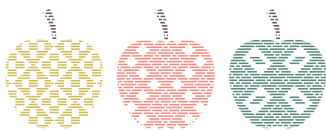
青森りんご
公式サイト



青森りんご
植栽150周年
instagram



一般社団法人
青森県りんご対策協議会



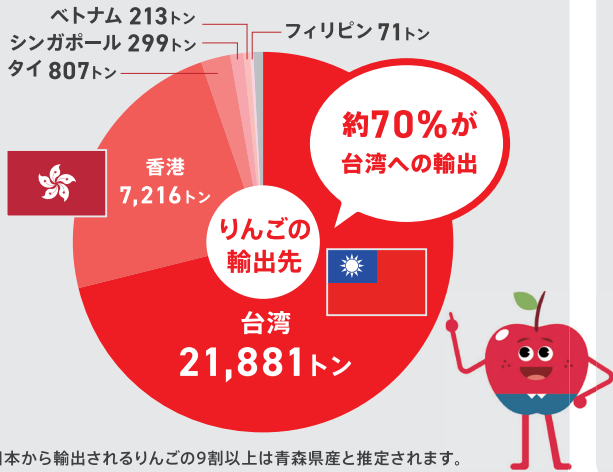
150th
AOMORI RINGO

青森りんご植栽150周年

青森りんごは青果物輸出のトップランナー

古くは明治32年(1899)に青森りんごがロシア領ウラジオストック港へ輸出された記録が残っています。現在、青森りんごは日本の青果物輸出のトップランナーとして、台湾をはじめとするアジア各国でも愛されています。

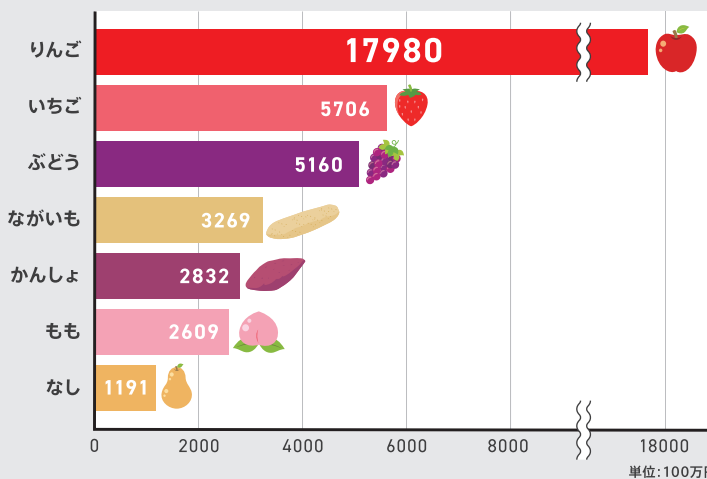
りんごの輸出量 30,688トン
令和5年産



※日本から輸出されるりんごの9割以上は青森県産と推定されます。

資料:財務省貿易統計(当該年9月~翌年8月)

2023年の野菜・果物等の輸出額
令和5年4月~令和6年3月

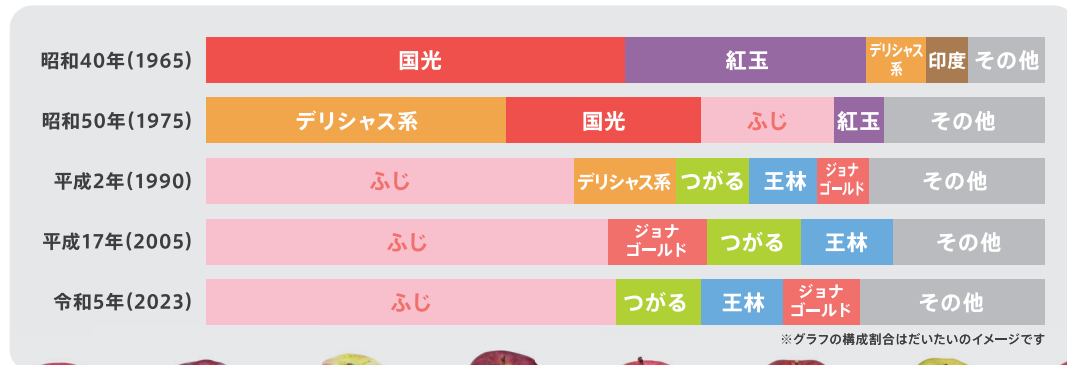


資料:財務省「貿易統計」を基に農林水産省作成

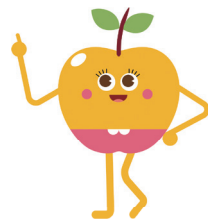
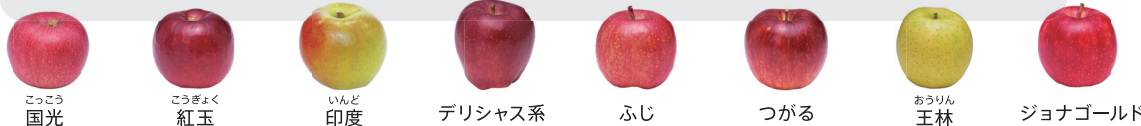
青森りんごの品種変遷

明治~昭和40年代前半までの約100年間は「国光」「紅玉」が2大品種でした。

昭和43年の国光大量投棄事件(りんごが売れずに山や川へ投棄され、「山川市場」と呼ばれた)などが起きたことから昭和45年ころから平成の初めまでの約20年間で品種更新が進み、主力品種が大きく入れ替わっています。



近年は黄色系りんごも増えていきます。青森県では自然環境の変化に適応した品種の開発など、「ふじ」に並ぶ次世代のエース級品種の育成に県を挙げて取り組んでいます。



りんご界のスーパースター「ふじ」の普及秘話

青森県藤崎町にあった農林省の試験場で育成された「ふじ」は、当初色づきが悪いなどの欠点があったこともあり、青森県のりんご農家は栽培に消極的でした。しかし、生産者の一人である齊藤昌美氏(「ふじの育ての親」と呼ばれている)はいち早く「ふじ」の優れた食味や貯蔵性の高さに目をつけ、「このりんごこそがこれからの主力品種になる」と確信。数々の苦勞を乗り越え「ふじ」の栽培方法を確立しました。齊藤氏は「ふじ」を栽培したいと希望する生産者には惜しげもなく自分が育てた「ふじ」の枝を切り、分け与えました。こうした齊藤氏らの功績により、「ふじ」の栽培は広まっていったのです。今では世界で最も栽培されている品種「ふじ」ですが、普及の陰には青森りんごの偉大な先人たちの努力と情熱があったのです。

